

# 慣用句の意味分析

——《驚き》を表わす動詞慣用句・一般動詞を中心に——

石田プリシラ

キーワード：慣用句、語彙性、語の場、共通の意味特徴、弁別の意味特徴

## 1. はじめに

慣用句の意味は句を構成する個々の語の意味の積み重ねとは異なり、句全体に固有のものであるとされている（宮地 1982, 村木 1991, 伊藤 1997b など）。この点で慣用句は「一般連語句」と区別できる<sup>1</sup>。例えば、「(フライパンで) 肉を焼く」や「(お母さんの) 手を引っ張る」といった一般連語句は、個々の構成要素の意味と構成要素を結ぶ統語的な関係によって意味が定まるのに対して、「手を焼く」(1)や「足を引っ張る」(2)といった慣用句の意味は、個々の構成要素の意味や、これらの構成要素間の統語的な関係からは導き出されない<sup>2</sup>。

(1) 仲人の夫妻がこの大人しい子供っぽい新夫婦の世話に手を焼いていた。(『禁色』59)

(2) 「屁理屈なんかでわたしたちの運動の足を引っ張らないで」(『日本』132)

さて、このような慣用句の意味をどのように分析すればよいだろうか。これまでの研究においてはいくつかのアプローチが提示されている。例えば宮地 (1991) や伊藤 (1997b, 1999b など) は慣用句の構成要素の比喩的な意味を、類例を比較することで明らかにしている。伊藤 (1997a, 1999c) は慣用句の「具象性」(すなわち構成要素の文字通りの意味によって表わされる事柄) を考察しており、この具象性から「慣用句としての意味」が生

<sup>1</sup> 慣用句の定義・範囲は先行研究の中でも異なっているが（例えば森田 1966, 白石 1977, 初山 1997 など）、本稿では便宜的に宮地 (1982, 1985) が提唱している定義・範囲にのっとることにする。宮地 (1982:238) によれば慣用句とは、「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」のことである（例えば「愚痴をこぼす」、「電話をかける」、「頭に来る」、「腹が黒い」、「あとの祭り」など）。一方「一般連語句」とは、二つ以上の語が（意味関係の許す限り）自由に結合してできる句のことである（宮地 1985, 1991）。なお慣用句と一般連語句を区別するための基準に関してはさらに吟味することが必要であると思われるが、これは今後の課題とする。

<sup>2</sup> 本稿では、句全体の意味が構成要素の意味の総和と一致しないという特性を「意味的固定性」と呼ぶ（これは石田 1999, 2002 で論じている「慣用性」と全く同じものである）。実はこの「意味的固定性」は絶対的なものではなく、意味的固定性の度合の高い慣用句もあれば（例えば「頭に来る」）低いものもある（例えば「目を伏せる」）。後者のものに関しては2節で触れる。なお慣用句の「形式的固定性」と「統語的固定性」については、石田 (1998, 2000) を参照願いたい。

じている場合があると述べている。また、Gibbs and O'Brien(1990)や Kövecses and Szabó (1996) は認知意味論の観点から慣用句の意味を検討しており、慣用句の比喩的意味が生まれる背景には様々な「概念メタファー (conceptual metaphors)」や「概念的写像 (conceptual mappings)」が働いていると主張している。

本稿では、慣用句の意味の問題を一般意味論・語彙論の枠組みの中に位置づけ、慣用句を類義語の関係にある慣用句・単語と比較することで、これら類義語の弁別的意味特徴を明らかにする。具体的には、「舌を巻く」と「目を見張る」といった動詞慣用句と、「おどろく」といった一般動詞を対象とし、これらの語を石田 (2003) で提示した方法を用いて分析していく<sup>3</sup>。なお、本稿で取り上げる語の対立の在り方も検討し、慣用句の意味と単語の意味の違い (つまり慣用句の特色) にも触れる。

## 2. 本稿の理論的な枠組みと分析方法

本稿の理論的な枠組みと分析方法に関しては石田 (2003) で詳しく論じているが、以下にその概略を述べる。

本稿では伊藤 (1989, 1997b) や村木 (1985, 1991) を踏まえて、慣用句に「語彙性」という特性があると考えられる。「語彙性」とは、慣用句が二つ以上の単語の組み合わせであるにもかかわらず、形式的にも意味的にも固定しており、句全体で単語と同じ振る舞いをするものである<sup>4</sup>。このことは、慣用句が一般に単語との交替が可能であることからわかる。

(3) 昨夜のことで太郎はまだ【腹を立てている／怒っている】ようです。

(4) 太郎は次郎の言葉【に耳を傾けた／を聞いた】。<sup>5</sup>

ところが慣用句の中には、単語との置き換えが難しい、あるいは置き換え不可能なものがある (「手を回す」や「手段を講ずる」と同じ意味の)「手を打つ」など)。ところでこのような慣用句には「意味的固定性」の度合が相対的に低いもの、すなわち一般連語句に近いものが多いと思われる (石田 1999, 2002)。単語との交替が不可能であるというのは、

---

<sup>3</sup> 動詞慣用句とは、「舌を巻く」や「手に入れる」など、「名詞+格助詞+動詞」といった構造を持つものである (宮地 1982, 森田 1985)。また本稿で言う「一般動詞」とは「おどろく」や「得る」などの (単語と見なせる) 動詞のことである。名詞にサ変動詞「する」が複合したものやその他の複合動詞については (「驚嘆する」や「びっくりする」など)、これも本稿で提示する分析方法の対象となると思われるが、本稿では少数の語から分析を始めることとし、取りあえず慣用句と一般動詞を対象を限定する。

<sup>4</sup> この「語彙性」は村木 (1985, 1991) の「単語性」と「既製品性」、また伊藤 (1989, 1997b) の「Reproduzierbarkeit (再生産性) (別称「Lexikalisiertheit (語彙性)」) にほぼ対応する。本稿では慣用句の意味の問題を語彙論の枠組みの中で扱うので、「語彙性」という用語を用いることにする。

<sup>5</sup> (4)のように、「耳を傾ける」は二格名詞をとるのに対して「聞く」はヲ格名詞をとるが、本稿ではこの二つは(4)のような文脈ではほとんど同じ事柄を表わしていると思われ、構文的な違いにもかかわらず交替可能であると考えられる。

個々の構成要素の慣用句中での独立性が高いことに関連しているのであろう。

しかしながら、上のような慣用句は日本語慣用句全体の一部だけであり、単語との交替が可能な慣用句の方が圧倒的に多いと思われる（例えば「顔を合わせる／会う」、「耳を傾ける／聞く」、「手に入れる／得る」、「頭に来る／怒る」、「腹を立てる／怒る」、「目を白黒させる／驚く」など）。よって本稿では多くの慣用句は単語と対等の語彙単位であるとみならず。そしてある一つの慣用句の意味を分析するために、これを同じ「語の場」（コセリウ 1982b, 1982d など）に属する他の語、つまり何らかの共通の意味を持っている他の慣用句や単語と比較し、これらの区別に関わっている弁別の意味特徴を一つずつ明らかにしていく。なお単語との交替が難しい（不可能な）慣用句の意味分析に関しては、機会をあらためて論じることとする。

本稿では「舌を巻く」、「目を見張る」と「おどろく」といった語が一つの「語の場」を構成していると考え。この語の場の設定に関しては別に論じているので（石田 2003:16-17）ここでは詳細を割愛するが、簡単にまとめれば次のようになる。上の三つの語は(5)のように互いに置き換えられてもほぼ同じ事柄を表わすので、これらは意味の面で共通の部分があると考え。

- (5) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには舌を巻く／目を見張る／おどろくものがあった。（「舌を巻く」=『夢の』41）

つまり上の置き換えた文はほぼ同じように人が意外なことに直面してびっくりしたという意味を表わしている。よって本稿では「舌を巻く」、「目を見張る」と「おどろく」の意味に「共通の意味特徴」があると考え、この「共通の意味特徴」を《驚き》と呼ぶことにする。また、この三つの語は《驚き》を表わす動詞慣用句・一般動詞」といった語の場も構成しているとする<sup>6</sup>。なお、この語の場には「舌を巻く」などのほかにも様々な慣用句や動詞が属していると思われるが（「腰が抜ける」、「目を白黒させる」、「肝をつぶす」、「呆気にとられる」、「たまげる」など）、本稿では紙幅の制限のためこの少数の語に対象を限定する。

ところで「舌を巻く」、「目を見張る」と「おどろく」は(5)のように互いに置き換えられると言っても、これらは全く同じ意味を表わすわけではない。では、この三つの意味的な違いをどのように明らかにできるだろうか。本稿では、次の手順で分析を進めていく。まず、問題の語の用例を収集・考察する。次に「置き換えのテスト」、「ただ…だけのテスト」、「最小対立テスト」などのテストを用いてこれらの語を二つずつ比較・検討していく<sup>7</sup>。複

<sup>6</sup> 本稿では共通の意味特徴は《》で示し、弁別の意味特徴は<>で示す。《驚き》と「おどろく」の違いに関しては石田（2003:16）を参照願いたい。なおこの《驚き》がさらにもっと細かい特徴に分解できるかといった問題が残されているが（例えば<心理性>、注14参照）、これは今後の課題とする。

<sup>7</sup> これらのテストの詳細に関しては石田（2003）を参照願いたい。この石田（2003）ではいくつかの例を示しながら弁別の特徴を抽出するテストを提示しているが、本稿ではこれらのテストを適用し、いくつ

数の母語話者に用例の容認性を調査し、この調査の結果をもとに各語の区別に関わっている弁別的意味特徴を抽出する。なお、本稿の用例に記されている容認性の判定は次の記号をもって示す。

記号なし…問題なく言える。普通に言える。

△……………可能かもしれないが、普通は言わない。

※ 母語話者間でゆれがあったものも「△」で示す。

\*……………言わない。言えない。

### 3. 分析——《驚き》を表わす動詞慣用句・一般動詞——

#### 3.1 「舌を巻く」と「目を見張る」

本節では「舌を巻く」と「目を見張る」を取り上げ、これらを区別している弁別的意味特徴を抽出していく。

次の文脈において「目を見張る」と「舌を巻く」は互いに置き換えられ、ほぼ同じ事柄（意外な物事に直面して驚いたこと）を表わしている。

- (6) 北がもう一つ〔目を見張った／舌を巻いた〕のは、呉の測候所の観測記録に関する次のような記述であった。（「目を見張った」＝『空白 391』）

しかしこの二つの句をよく観察すると次のような相違が見えてくる。「目を見張った」は「記述」そのもの（記述の内容やその詳細さなど）に対する驚きを表わしているのに対して、「舌を巻いた」は記述を書いた者に対する驚きを表わしている。すなわち後者の場合は、「北」が優れた記述を目にしてその書き手の能力に驚いている様子が表わされていると解釈されるのである。

「目を見張る」に注目しながら上に述べた違いを検討しよう。

(7a) 江藤伍長は山の大きさに目を見張った。（『八甲』128、一部加筆）

△(7b) 江藤伍長は山の大きさに舌を巻いた。

(8a) 大野陸軍病院に着いた菊池教授は、災害の規模の大きさと変わり果てた病院の姿にただ目を見張った。（『空白』340）

\* (8b) …菊池教授は、災害の規模の大きさと変わり果てた病院の姿にただ舌を巻いた。

(7a)と(8a)はごく自然な表現であり、これらの文で「目を見張る」は実際目で見える物事に対して驚くこと、つまりあるものの外面的な性質や様子に対して驚くことを表わしている。ところが(7b)と(8b)のように、こういった文脈では「舌を巻く」は容認性が落ちる。

---

かの語を実際に分析する。

このことから「舌を巻く」は通常は物事の外面的な性質や様子に対する驚きを表わさないことが窺える。なお(7b)は、「山」が誰かが作った人工的なものだという文脈であれば、容認性が上がるが、こういった場合には、「舌を巻く」は山そのものに対する驚きを表わすのではなく、むしろ山を作った人の能力・技術に対する驚きを表わすと解釈される。

次の用例からも、「目を見張る」の方は物事の外面的な性質や様子に対する驚きを表わすことがわかる。

(9a) この計画が立てられてからの、優子の変貌には目を見張るものがあった。(『夢の』283)

\* (9b) この計画が立てられてからの、優子の変貌には舌を巻くものがあった。

(9a)のように「目を見張る」は「(優子の) 変貌」といった二格名詞と共起するが、(9b)のように「舌を巻く」はこの名詞とは共起しない。この「変貌」とは、例えば優子が美しくなったことや、優子の行動や態度が変わったことなどのことであり、優子の様子に何らかの目に見える変化が生じたことを表わしている。(9a)が容認されることは、「目を見張る」がこういった外面的な様子に対する驚きを表わすことを示唆する。一方(9b)が容認されないのは、「舌を巻く」が外面的な様子に対する驚きを表わさないことを示唆する<sup>8</sup>。

さて、次は「舌を巻く」が容認される用例を見てみよう。

(10a) 「全部あっているじゃないか！」太郎は花子の暗算に舌を巻いて言った。

△(10b) 「全部あっているじゃないか！」太郎は花子の暗算に目を見張って言った。

(10a)の「舌を巻く」は「(花子の) 暗算」に対して驚くこと、つまり目に見えない能力に対して驚くことを表わしている。ところが(10b)のように、こういった文脈で「目を見張る」を用いると容認性が落ちる。つまり「舌を巻く」は(能力など)内面的な性質に対する驚きを表わすのに対して、「目を見張る」はそのような驚きは表わさないことがわかる。なお、(10b)は全く容認されないわけではないが、容認される場合は(10a)の解釈とは違って花子の能力ではなく、その能力の外面的な現われ(例えば紙に書かれた解答など)を見て驚いたと解釈される。

(11a)は(10a)と同様に内面的なものに対して驚くことを表わすが、この場合もやはり「舌を巻く」は「目を見張る」に置き換えられない。

---

<sup>8</sup> (9b)を容認する話者が全くいないわけではないが、言えるとすれば、「舌を巻く」は「優子の変貌」そのものに対する驚きを表わすのではなく、むしろ「変貌」を引き起こした「優子」の能力や努力に対して驚きを表わしていると解釈される。

(11a) 太郎は花子の博識に舌を巻いた。

\* (11b) 太郎は花子の博識に目を見張った。

(11a)は、太郎が「(花子の) 博識」といった知的な能力に対して驚いた様子を表わしているが、(11b)のように、「目を見張る」はこの「博識」と衝突している。これは「目を見張る」の意味特徴の中に「博識」のような内面的なものと矛盾するものがあるからであろう。

上の考察をふまえて、本稿では<内面性>と<外面性>といった弁別の意味特徴を設定し、「舌を巻く」は<内面性>を持っているのに対して「目を見張る」は<外面性>を持っているとする。また、この二つの慣用句が互いに置き換えられる場合は、驚きの対象は外面的とも内面的とも捉えられる場合であると考えられる。

(12) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには【舌を巻く／目を見張る】  
ものがあつた。(=5)

2節にも述べたように、この文脈では「舌を巻く」も「目を見張る」もほぼ同じ事柄を表わしているように見えるが、実は「舌を巻く」は「天賦のバランス」といった優れた能力に対する驚きを表わしているのに対して、「目を見張る」はこういった能力の外面的な現われ、つまり実際目で見ている行動に対して驚きを表わしていると理解されている。これは、「舌を巻く」と「目を見張る」がそれぞれ<内面性>と<外面性>という異なる弁別の特徴を持っていることによる。言い換えれば、「天賦のバランス」といった二格名詞が内面的なものや外面的なものどちかを表わすのかということ、これと共に起る慣用句の意味特徴によって定まるのである。なお、本節の始めに見た例文(6)に関しても同じことが言える<sup>9</sup>。

### 3.2 「舌を巻く」と「おどろく」<sup>10</sup>

次の文脈において「舌を巻く」と「おどろく」は交替可能であり、ほぼ同じ事柄を表わしている。

<sup>9</sup> 本節で設定した<外面性>は、その対象が人やものの様々な性質・様子など、かなり広範囲のものに及ぶが、<内面性>の対象は、主に人の(優れた)能力・腕前に限られる。このように、<内面性>の対象となるもの数・種類が<外面性>のそれよりかなり少ないため、この二つの特徴は対等の関係にあるのかという疑問もわいてくる。この問題についてはさらに検討する余地があるが、今後の課題にする。

<sup>10</sup> 後述するように、「舌を巻く」の意味は「おどろく」の意味に含まれており、これらの語は上下関係にあると思われる(hyponymy)。「舌を巻く」の弁別の意味特徴を明らかにするためには、むしろこの語と同じレベルで対立している語と比較した方が有効であるとする立場がある(例えば「目を白黒させる」や「目を丸くする」)。しかし本稿では、上のような包含的関係は弁別対立のタイプの一つであると見なし、「おどろく」が用いられるのに対し「舌を巻く」が用いられないといった文脈に注目することによって(例えば16~17)「舌を巻く」の弁別の特徴を明らかにできると考える。

- (13a) 二子山親方が「若手なのに相撲がしっかりしている」といって舌を巻いた。(『朝日・朝』1980.11.12, 宮地 1982:107 から引用, 本稿筆者が一部修正)
- (13b) 二子山親方が「若手なのに相撲がしっかりしている」といって驚いた。
- (14a) 岩の軽業師の別名に背かず, その天賦のバランスには舌を巻くものがあった。(=5)
- (14b) 岩の軽業師の別名に背かず, その天賦のバランスには驚くものがあった。

つまり, ある人が意外なことにあってびっくりしている様子を表わしている。しかし, (13a)と(14a)の「舌を巻く」は(13b)と(14b)の「おどろく」と違って, この意味の他に称賛の意味も表わしていると言える。つまり(13a)は, 「二子山親方」が若手の力士の能力に驚きつつ感心・感服もしていることを表わす。(14a)も同様に, 軽業師の「天賦のバランス」が意外なものであると同時に感心・感服すべきものであることを表わしている。このことから, 「舌を巻く」が「驚き+α」を表わすこと, つまり《驚き》の他にそれを限定するもう一つの意味特徴を持っていることが推測できる。

この「+α」に相当する意味特徴を明らかにするために, まず「ただ…だけ」というフレームを用いてテストしてみよう。

- (15a) 太郎は花子の博識に舌を巻いたというよりも, 驚いたんだよ。 → ②
- (15b) 太郎は花子の博識に舌を巻いたというよりも, ただ驚いただけだよ。 → ①
- \* (15c) 太郎は花子の博識に驚いたというよりも, ただ舌を巻いただけだよ。 → ③

右側に示したように, この三つの文の容認性の高さの度合は上から②, ①, ③の順になる。(15a)と(15b)は両方とも成立するし, ほぼ同じ意味を表わしている。太郎にとって花子の博識は意外なものであるが, 太郎はその博識を特に称賛してはいない, といった意味なのである。ところで(15b)が(15a)より容認性が高いのは, この文では「ただ…だけ」というフレームによって「驚いた」から感心・感服の意味がとり除かれているから, つまり「おどろく」の方には「+α」の意味がないことを明示しているからであろう。また(15c)が容認されないことは, やはりこの「+α」の意味が「おどろく」の方には含まれていないが, 「舌を巻く」の方には含まれていると感ぜられるからである。

次の用例からも, 「舌を巻く」が感心・感服の意味を表わすこと, つまりプラスの評価を表わすことがわかる。

- (16a) 「窃盗と傷害の罪名で, ぼくも驚いてしまったんです。あんなやさしい子が, どうしてそんなことをしたのかと思うと, どうも気が重くて…」(『塩狩』277, 一部加筆)
- \* (16b) 「窃盗と傷害の罪名で, ぼくも舌を巻いてしまったんです。…」

(16b)が容認されないことは、この文における驚きの対象が感心・感服の対象とはなりにくいもの、すなわちマイナスの評価を受けやすいものであることに関連すると思われる。つまり「舌を巻く」が「(窃盗と傷害の) 罪名」という名詞句と衝突しており、これは「舌を巻く」の意味特徴の中に「(窃盗と傷害の) 罪名」がもつマイナス評価と矛盾するものがあることを示唆する。そこで本稿では、<プラス評価>という意味特徴を設定し、この特徴が「舌を巻く」のいわゆる「+α」の意味に当たると考える。

では、次にこの<プラス評価>に関して「おどろく」を検討しよう。(16a)はごく自然な文である。「花子の衰弱ぶりに驚いた」や「彼が怪我をしたという知らせに驚いた」などの表現も可能である。従って「おどろく」はマイナスの評価を受けやすいものに対する驚きを表わせることがわかる。またその一方で(13b)や(14b)で見たように、通常プラスの評価を受けるものに対する驚きも表わせる。よって「おどろく」は<プラス評価>と<マイナス評価>のどちらを持つかについてはニュートラルであると思われる。このことは次の用例で確認できる。

(17a) 太郎のコンチェルトの演奏はほとんど完璧だったから花子は驚いていたわよ。

(17b) 太郎のコンチェルトの演奏はほとんど完璧だったから花子は舌を巻いていたわよ。

(17c) 太郎のコンチェルトの演奏は間違いだらけだったから花子は驚いていたわよ。

\* (17d) 太郎のコンチェルトの演奏は間違いだらけだったから花子は舌を巻いていたわよ。

(17b)と(17d)のように、「舌を巻く」は「ほとんど完璧」といったプラス評価の文脈においては容認されるが、「間違いだらけ」といったマイナス評価の文脈においては容認されない。このことは「舌を巻く」がやはり<プラス評価>を持っていることを意味する。一方(17a)と(17c)は両方とも容認される。「おどろく」がこのようにプラス評価の文脈にもマイナス評価の文脈にも使われることから、「おどろく」はやはり<プラス評価>と<マイナス評価>の意味特徴に関してニュートラルであることがわかる。

ところで<プラス評価>と<マイナス評価>については、これらの弁別的特徴を両方とも設定することが果たして必要であろうか。<プラス評価>のみを設定し、「舌を巻く」は<+プラス評価>であるのに対して「おどろく」は<±プラス評価>であると言うだけで十分ではないだろうか。

本稿の分析に限って言えば、<プラス評価>のみを設定すれば良いと思われる。この特徴をもって「舌を巻く」、「目を見張る」、「おどろく」における評価の面での違いをより簡潔に表わすことができるからである。ところが分析の対象を増やした際には、<プラス評価>のみで他の語との違いを適切に表わせるかどうかは疑問である。例えば「呆気にとら



れる」といった慣用句はマイナス評価の驚きを表わしているとする<sup>11</sup>。もし「プラス評価がないこと＝マイナス評価があること」といった論理的な関係を別に定めれば、この「呆気にとられる」が<−プラス評価>であると言うことも確かに言えよう。しかしながら、この慣用句の場合はむしろ<+マイナス評価>であると言った方が自然でわかりやすい記述になると思われる<sup>12</sup>。

本稿では語の場の拡大を視野に入れ、<プラス評価>と<マイナス評価>という二つの意味特徴を設定する。そして「舌を巻く」は<+プラス評価>と<−マイナス評価>であるのに対して、「おどろく」は<±プラス評価>と<±マイナス評価>であるとする。

### 3.3 「目を見張る」と「おどろく」

3.1では、「舌を巻く」と「目を見張る」が<内面性>と<外面性>という意味特徴を用いて区別できることを示した。「目を見張る」と「おどろく」の対立もこれらの特徴によって区別できると思われる。つまり「目を見張る」は<外面性>を持っているのに対して「おどろく」は<外面性>と<内面性>に関してニュートラルであると思われるのである。紙幅の制限のため詳しい考察を省略するが、次の用例を見てみよう。

- (18) 「おっ！」湯呑み茶碗を覗き込んだ荒井定市は、{目を見張った／驚いた}。荒井家の朝食は純和風と決まっているので、当然日本茶が飲まれるのである。（「目を見張った」=『女社長』3）
- (19) 太郎は花子の博識に {驚いた／\*目を見張った}。（「目を見張った」=11b）

上の用例から、「目を見張る」はやはり実際目で見えるものに対する驚きを表わすもので、<外面性>を持っていると考える。これに対して「おどろく」は実際目で見えるもの(18)や見えないもの(19)のどちらに対してもびっくりすることを表わせる。「おどろく」が(7～9)においては「目を見張る」に、また(10)においては「舌を巻く」に置き換えられること

---

<sup>11</sup> 次の文脈において「あっけにとられて」と「おどろいて」は両方とも容認されるが、「あっけにとられて」の方は「私」が少し呆れたといった意味、つまりひどいことに驚いたという意味を表わしていると解釈される。

(i) 「ねえ、英和と和英って、どちらがうの？」  
彼女は声をひそめ、まじまじと大きな目をみはって私を見た。{あっけにとられて／おどろいて}  
私は手の本をおいた。彼女はほんとうにその区別がわからないらしかった。（「あっけにとられて」=『パニ』96）

また (ii) のように、「呆気にとられる」はプラス評価の文脈には用いられにくい。

(ii) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには {舌を巻く／\*呆気にとられる} ものがあった。（「舌を巻く」=5）

よってこの慣用句にはマイナス評価の意味が含まれていると思われる。

<sup>12</sup> この点に関しては Lyons (1977:322-323) を参照されたい。

からも、この語が外面的なものとの内面的なものとのどちらに対する驚きも表わせることがわかる（用例を省略）。よって本稿では「おどろく」は＜内面性＞と＜外面性＞のどちらを持つかについてはニュートラルであると考え（＜±内面性＞、＜±外面性＞）。

「目を見張る」と「おどろく」をさらに詳しく見れば、これらの区別にもう一つの弁別の特徴が関わっていることが窺える。

(20a) 風子は肝をつぶしたのか、きよとんと目を見張っている。（『結婚』326）

\* (20b) 風子は肝をつぶしたのか、きよとんと驚いている。

(21a) だがきいた人はみな志方との結婚に反対した。

使用人達まで信じられぬように目を見張ったまま、うなずこうとはしない。

（『花埋み』708）

\* (21b) …使用人達まで信じられぬように驚いたまま、うなずこうとはしない。

(20b)と(21b)が容認されないのは、これらの文が余剰的である（redundant）と感じられるからである。つまり「きよとんと」(20b)と「信じられぬように」(21b)は意外なことに直面した様子を描いており、この意味と「驚いた」の意味が重なっているのである。これに対して(20a)と(21a)はごく自然な文なので、「目を見張る」は驚きの様子以外の意味も表わしていると考えられる。このことは、「目を見張る」が「おどろく」という語そのものと共起できることからわかる。

(22) 「知り合いか？」

「何言ってるんです。尾島さんの奥さんじゃありませんか」

北岡は驚いて目を見張った。なるほど、よく見れば、確かに尾島久子である。

（『女社長』410）

つまり(22)においては、主体が「驚いた」ことと「目を見張った」ことは（ほとんど同時に起こったにもかかわらず）別個の出来事であると解釈されるのである。

「目を見張る」に含まれている「驚きの様子以外の意味」を明らかにするために、(20～22)の解釈を手がかりにできると思われる。(22)は「北岡は驚いて目を大きく開いた」と言い換えることができる。つまり「目を見張る」は身体部位の目（眼）の物理的な動きを表わしているのである。(20)と(21)に関しても同様である。また、「目を見張る」が「きよとんと」(20a)や「信じられぬように」(21a)と共起することからも、この慣用句に「驚きの様子以外の意味」があることが窺える。つまりこれらの副詞句は普通顔の表情や動作の様態を描くものなので、「目を見張る」がこれらと共起することは、この慣用句が何らかの表情・動作を表わすことを示唆する。

「目を見張る」に連体修飾語を付加できることから、この慣用句が表情・動作を表わす

ことがわかる<sup>13</sup>。

(23) 環子は不意に振り返って、暗い目を瞳と… (『ベティ』238)

(24) 「なんで？」

とモト子さんはどんぐり眼をみはって、それでも口のほうは休みなく食べていた。  
(『サンデー毎日』1980.11.30, 宮地 1982:226 から引用)

上の用例において「暗い」と「どんぐり」といった連体修飾語は「目」にかかっているの  
で、この「目」は身体部位の意味を表わしていると解釈される。また「目を見張る」はこ  
の身体部位の物理的な動き、つまり目を大きく見開くという動作を表わしているというこ  
とになる。

次に「おどろく」に注目しながら上に述べた違いを検討しよう。

(25) 通辞が {驚いた / \*目を見張った} ような表情でその言葉を聞き、やっとためら  
った後、通訳をするまで、彼は白湯の少し残った茶碗を笑いながら見ていた。「驚  
いた」= 『沈黙』334)

(26) 「そんな {驚いた / \*目を見張った} 顔をして、信夫さん、おかあさまも人間なの  
ですよ。」(「驚いた」= 『塩狩』281)

「驚いたような表情」や「驚いた顔」はごく自然な表現であり、主体の心理的な活動が外  
部に表われたことを意味している。ところがこの文脈においては「驚いた」を「目を見張  
った」に置き換えられない。「目を見張った」が「～ような表情」や「～顔」という表現と  
そぐわないからである。「目を見張る」はすでに「(驚いた) 顔をする」という動作・表情を  
表わしているので、これを「～ような表情」や「～顔」と一緒に用いると文が余剰的にな  
るのである。実は(25)を次のように書き換えれば「目を見張る」の容認性が上がり、書き  
換えた文は「通辞」が驚いたような表情をしたことを表わしていると解釈される。

(25) 「通辞が目を見張ってその言葉を聞き…」

(20~26)の考察から、「おどろく」はもっぱら心理的な活動を表わすのに対し、「目を見  
張る」は心理的な活動だけでなく「目を大きく開く」といった物理的な動作・表情も表わす  
ということがわかった。よって本稿では<表出性>といった弁別的特徴を設定し、「おどろ

---

<sup>13</sup> 宮地 (1982:226) によれば「目を見張る」に連体修飾語を付加することはあまり一般的ではないが、  
本稿で収集したデータには(23)や(24)など、いくつかの実例が見出されたし、本稿の調査でもこれらの用例  
は「問題なく言える」と判定されたので、ここではこの慣用句には連体修飾語を付加できると考える。

く」は<-表出性>であるのに対し、「目を見張る」は<+表出性>であるとする<sup>14</sup>。

最後に3.2で設定した<プラス評価>と<マイナス評価>を取り上げてみよう。3.2で「おどろく」はこれらの意味特徴に関してニュートラルであることが明らかになったが、「目を見張る」はどうであろうか。まず、「目を見張る」は(27)のようにプラス評価の文脈に用いられることが多い。

(27) 恭子はこの青年の中に宿る正真正銘の純潔さに 目を見はった／驚いた。(「目を見張った」=『禁色』104)

また連体修飾成分となった場合には、もっぱらプラス評価の意味を表わすと思われる(例えば「目を見張るような棋力の進歩」, 「目を見張るような成長ぶり」, 9aや12の「目を見張るもの」)。ところがこの慣用句は(18)や(24)のように、対象に対する評価ではなく、単に意外な物事に直面して驚いただけのことを表わす場合もある。さらにまた(21a)や(28)のように、マイナス評価の文脈に用いられる場合もある。

(28) 大野陸軍病院に着いた菊池教授は、災害の規模の大きさと変わり果てた病院の姿にただ 目を見張った／驚いた。(「目を見張った」=8a)

よって本稿では「目を見張る」も「おどろく」と同様に<プラス評価>と<マイナス評価>に関してニュートラルであると考えるのである。

### 3.4 分析のまとめ

3.1から3.3までの考察を表1のようにまとめる(次ページ)。

本稿で明らかになった弁別的特徴をもとにして個々の慣用句の定義をすることができると思われる。例えば「目を見張る」は《驚き》のほか<外面性>と<表出性>を持っており、<プラス評価>と<マイナス評価>に関してはニュートラルである。従って、この慣用句は「(人や物事の) 外面的な性質・様子に対して驚いて目を大きく見開く」ことを表わし、「マイナス評価とプラス評価の文脈どちらにも使われる」と言える。これに対して「舌を巻く」は、《驚き》、<内面性>、<プラス評価>という特徴を持っているが<表出性>は持っていないので、「(能力など) 内面的な性質に対して感心・感服する」ことを表わし、「物理的な動作・表情は表わさない」と言える。このようにすれば、(辞書や日本語の

---

<sup>14</sup> 「舌を巻く」も「おどろく」と同様にもっぱら心理的な活動を表わすもので<-表出性>であると思われるが、紙幅の都合でこの点についての考察を割愛する。なおこの<表出性>のほか<心理性>といった特徴を設定することも可能ではあるが、こういった特徴は本稿で対象としている語を区別するための役には立たないし、また2節に挙げた共通の意味特徴《驚き》に含まれていると思われるので、本稿では<表出性>のみを設定すればよいと考える。

【表1】「舌を巻く」、「目を見張る」、「おどろく」の弁別的意味特徴

意味特徴 語	弁別的意味特徴				
	<内面性>	<外面性>	<プラス 評価>	<マイナス 評価>	<表出性>
舌を巻く	+	-	+	-	-
目を見張る	-	+	±	±	+
おどろく	±	±	±	±	-

【「+」: 意味特徴を持つ, 「-」: 意味特徴を持たない, 「±」: 意味特徴に関してニュートラル】

教科書において) 類義語の関係にある慣用句や一般の語の意味的な違いを明確に提示できると思われる。

なお「舌を巻く」、「目を見張る」と「おどろく」の対立には、本稿で抽出した弁別的意味特徴以外のものも関わっている可能性が残されているが、(3.1~3.3でも述べたように) 本稿では少なくともこれらの語を区別するためには表1で示した特徴で十分であるとする。

#### 4. おわりに

最後に、本稿で分析した語の対立の在り方に触れたい。表1のように、「舌を巻く」は<内面性>と<プラス評価>を持っているのに対して、「おどろく」は<内面性>と<外面性>、また<プラス評価>と<マイナス評価>に関してニュートラルである。つまり「舌を巻く」の意味は「おどろく」の意味に包含されており、「おどろく」と「舌を巻く」は上下関係にある (hyponymy)。従って「舌を巻く」は「おどろく」に比べれば使用制限が厳しいということになる。「舌を巻く」は「おどろく」によって置き換えられる場合がほとんどであるが (13 や 14 など)、「おどろく」は「舌を巻く」によって置き換えられない場合が多いのである (16 や 17cd など)。

一方、「おどろく」と「目を見張る」は上のような上下関係にはなく、対等の立場で対立している。「目を見張る」は<外面性>を持っているのに対して「おどろく」は<内面性>と<外面性>に関してニュートラルであるため、「おどろく」を「目を見張る」に置き換えられない場合がある (例えば 19)。しかし「目を見張る」は<+表出性>であるのに対して「おどろく」は<-表出性>であるため、「目を見張る」を「おどろく」に置き換えられない場合もあるのである (20b や 21b など)。言い換えるとこれらの語はそれぞれ特有の意味特徴を持っているのである。

上のことから、慣用句と一般の語の対立関係には少なくとも対等と上下関係の二つのパターンがあることがわかる。ところでこの上下関係には逆のパターン、つまり慣用句の方が上位で一般の語の方が下位であるといった関係は成立しないだろう。これは慣用句がそ

れ特有の意味特徴、すなわち弁別の意味特徴を持っている場合が多いからだと思われる<sup>15</sup>。慣用句が一般の語と比べて表現力豊かな言葉であると言われることも、慣用句の方が弁別の意味特徴が多いことに関連するであろう。この問題に関してはさらなる研究が必要であるが、機会をあらためて論じることとする<sup>16</sup>。

今後に残された課題に触れて本稿を結ぶ。

- ① 本稿では、分析対象を問題の語の場に属するほんの一部の慣用句や動詞に限った。今後はその対象を増やし、この語の場を細部にわたって分析していきたい。
- ② 本稿で利用した方法は慣用句の対照研究（例えば日本語の慣用句と英語の慣用句の対照研究）にも適用できると思われる。この課題についても、今後とりこんでいくこととしたい。

#### 【参考文献】

- 石田プリシラ(1998)「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5:43-56. 筑波大学文芸・言語研究科 応用言語学コース
- (1999)「動詞慣用句の慣用性の度合—統語的固定性を目安として—」『筑波応用言語学研究』6:69-83. 筑波大学文芸・言語研究科 応用言語学コース
- (2000)「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7:24-43. 国立国語研究所
- (2002)「日本語慣用句の研究—慣用句の特性と意味を中心に—」筑波大学大学院文芸・言語研究科 博士論文(未公刊)
- (2003)「慣用句の意味を分析する方法」『日本語と日本文学』37:13-26. 筑波大学国語国文学会
- 伊藤真(1989)「Phraseologie をめぐる諸問題」『福岡大学人文論叢』第21巻第1号:385-411.
- (1997a)「日独慣用句の具象性と意味機能」『Rhodus』13号:118-130. 筑波ドイツ文学会
- (1997b)「言語の具象性・比喩性・受動性—日・独慣用句をめぐって—」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』249-297. 三修社
- (1999a)「慣用句的意味の成立要因について」『Rhodus』15号:185-197. 筑波ドイツ文学会
- (1999b)「構成要素の比喩的意味について—日独慣用句の身体部位を中心に—」『東西言語文化の類型論』:763-788. 筑波大学特別プロジェクト研究 研究報告書II
- (1999c)「慣用句の具象性についての一考察」『言語文化論集』第51号:95-117. 筑波大

---

<sup>15</sup> 例えば「耳を傾ける」は<+意図性>であるのに対して「聞く」は<±意図性>であり(石田2003)、「鼻にかける」は<マイナス評価>であるのに対して「誇る」は<プラス評価>と<マイナス評価>に関してニュートラルであると思われる。

<sup>16</sup> なお、慣用句が一般の語よりも弁別の特徴が多いことは、慣用句が複合語的な表現であることにも関連すると思われる。例えば「目を見張る」が<外面性>と<表出性>という特徴を持っているのは、この慣用句に含まれている名詞「目」が慣用句中で身体部位の意味の一部を残しており、その一部が慣用句全体の意味に関与しているからであると推測できる。個々の構成要素が慣用句中でその意味を残しているかどうかを判断する方法に関しては、石田(1999, 2002)を参照されたい。

学現代語・現代文化学系

- 景山太郎編(2001)『動詞の意味と構文』大修館書店
- 国立国語研究所(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43) 秀英出版
- コセリウ E. 宮坂豊夫・西村牧夫・南館英孝訳(1982)『構造的意味論』(コセリウ言語学選集 第1巻) 三修社
- 西村牧夫訳(1982b)「通時構造意味論のために」コセリウ 1982a 所収
- 南館英孝訳(1982c)「語彙の構造的な研究への序章」コセリウ 1982a 所収
- 西村牧夫訳(1982d)「語彙素構造」コセリウ 1982a 所収
- 宮坂豊夫訳(1982e)「語彙の機能的考察」コセリウ 1982a 所収
- 白石大二(1977)「解説 国語慣用句とその研究のもたらすもの」『国語慣用句大辞典』 525-593. 東京堂出版
- 宮地裕(1982)「慣用句解説」『慣用句の意味と用法』 237-265. 明治書院
- (1985)「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』 1月号: 62-75. 明治書院
- (1991)「慣用句の意味」『「ことば」シリーズ 34 言葉の意味』 65-76. 文化庁
- 村木新次郎(1985)「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』 1月号: 15-27. 明治書院
- (1991)『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- 初山洋介(1997)「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』 第80号: 29-43.
- 森田良行(1966)「慣用的な言い方」『講座日本語教育』 2: 61-78. 早稲田大学語学教育研究所
- (1985)「動詞慣用句」『日本語学』 1月号: 37-44. 明治書院
- Bendix, Edward Herman (1966) *Componential Analysis of General Vocabulary: The Semantic Structure of a Set of Verbs in English, Hindi, and Japanese*. Bloomington: Indiana University.
- Coseriu, Eugenio and Horst Geckeler (1981) *Trends in Structural Semantics*. Tübingen: Narr.
- Gibbs, Raymond W. (1990) Psycholinguistic studies on the conceptual basis of idiomaticity. *Cognitive Linguistics* 1(4): 417-451.
- and Jennifer E. O'Brien (1990) Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning. *Cognition* 36: 35-68.
- Kövecses, Zoltán and Péter Szabó (1996) Idioms: A View from Cognitive Semantics. *Applied Linguistics* 17(3): 326-355.
- Lyons, John (1977) *Semantics* (Vol. I). Cambridge University Press.
- Nida, Eugene A. (1975) *Componential Analysis of Meaning: An Introduction to Semantic Structures*. The Hague: Mouton Publishers.

【用例出典】

『禁色』=三島由紀夫『禁色』/『空白』=柳田邦男『空白の天気図』/『結婚』=山口臈『結婚します』/『日本』=井上靖『日本亭主図鑑』/『八甲』=新田次郎『八甲田山死の彷徨』/『パニ』=開高健『パニック・裸の王様』/『ベティ』=山本道子『ベティさんの庭』/『夢の』=森村誠一『夢の虐殺』

※以上のものは、宮地裕編(1985)『日本語慣用句用例集』(大阪大学文学部)からの引用。

『女社長』＝赤川次郎『女社長に乾杯！』／『塩狩』＝三浦綾子『塩狩峠』／『沈黙』＝遠藤周作『沈黙』／『花埋み』＝渡辺淳一『花埋み』

※以上のものは、『新潮文庫の100冊』（CD-ROM版・1995）からの引用。

※出典が示されていないものは作例である。

#### 【付記】

本稿は、石田（2002）の一部と慣用句研究会2003年10月4日定例会（於立教大学）の口頭発表に補足・修正を加えたものである。発表の際には研究会員の方々から、また本稿の執筆にあたっては筑波大学の高田誠先生、湯沢質幸先生、坪井美樹先生、岡崎敏雄先生、伊藤眞先生から、有益なご教示・ご指導をいただいた。また、日本語チェックにあたっては杉山桂子さんに大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げる。